

〔研究会報告〕

LA MANDALA 描画の周辺

——ロサンゼルス現代美術家／絵仏師の視点

末村正代

SUEMURA Masayo

2023年11月23日、南山宗教文化研究所主催で、2023年度ロサンゼルス市個人芸術家助成金(The City of Los Angeles Individual Master Artist Project COLA 2023 IMAP)¹選出アーティストであるWakana Kimura(ワカナ・キムラ)氏²を招き、アーティスト・トーク「LA MANDALA 描画の周辺——ロサンゼルス現代美術家／絵仏師の視点」が開催された。後半は、中国雲南省を主なフィールドに、「装い」の文化に関する研究を進めている文化人類学者、南山大学人類学研究所第一種研究所員・人文学部准教授の宮脇千絵氏との対談がおこなわれた。当日は、学内だけでなく、名古屋の美術愛好家の方など、多様な参加者が集まった。トークは、日本とアメリカ、伝統と革新、〈アート〉と〈美術〉など諸領域を横断しながら展開し、啓発的で意義深い会となった。以下、講演・コメント・質疑応答の順で要略を記す。

11月13日～12月3日には、講演会にあわせて、南山大学ライネルス中央図書館展示エリアでWakana氏の作品展示「Daily Practice」展³も開催され、「Daily Practice」

-
1. ロサンゼルス市文化局が諸分野のアーティストを対象に実施するグラント・プログラム。選出者は「Creative Treasures」と称され、ロサンゼルス・アート・シーンの顔として、ギャラリー展示やショーケースの開催などの活動を一年間おこなう。
 2. 静岡県生まれ、ロサンゼルス市在住。東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業。カリフォルニア州オーティス美術大学大学院でMFA(美術学修士)修得。ロサンゼルス市地下鉄のThrough the Eyes of Artistsシリーズ(イングルウッド)、同市Robertson Recreation Centerの壁画(公認壁画家の一人)、福井県円成寺の越前曼荼羅、曹洞宗北米別院禅宗寺や埼玉県長光寺の涅槃図などを手がける。南カリフォルニア大学、ポモナ大学、カンザス大学、桃山大学など講演も多数。Wakana Kimura氏の作品・活動の詳細に関しては、「WAKANA KIMURA STUDIO」(<https://www.WAKANAKIMURA.COM>)を参照されたい。
 3. 「Daily Practice」展については、南山大学図書館ウェブサイト「展示エリア企画(11月)について」

と名づけられた作品群のうち36作品が展示された。同図書館 NANTO ルームでおこなわれた講演会では、会の前後や休憩時間に展示を鑑賞する参加者も散見された。

講演：Wakana Kimura 氏

(以下は講演当日の音声記録を元に簡略化したものです。講演に含まれる Wakana Kimura の発言やその中のコンセプトや画像は「創作的表現」(著作権法2条1項1号)が含まれる Wakana Kimura による知的著作物です。いかなる形においても無断転用は著作権法により禁止されています。)

はじめに、「Daily Practice」展について。1986年から2019年まで毎日制作してきた作品の一部を展示しています。美の終わらない追求がコンセプトです。このシリーズの始まりは、医師である父の患者さんからの手紙に礼状を書く母の横で官製葉書に絵を描いたことから始まりました。その後、33年間毎日同じ官製葉書のサイズの紙に大作の傍ら日々制作を続けてきました。



Daily Practice 展 Photo by Wakana Kimura Studio ©Wakana Kimura

(<https://office.nanzan-u.ac.jp/library/about/activity/027074.html>, 2024年5月2日閲覧) 参照。

父の仕事の都合で幼少期は日米両国で引越しの多い生活でした。東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻に進学し、在学中は保存修復に関心を持っていました。2005年の都内での展示写真を見ていただくとわかりますが、渡米前は今よりも抽象的な作品を制作していました。卒業後は海外へ。ベルリン、ロンドン、ニューヨークを視察し、最終的にロサンゼルスを拠点と決めてオーティス美術大学大学院に進学し、美術学の修士号 (Master of Fine Arts) を取得しました。



個としての存在、他との関係 (2005)

Photo by Junich Hirose / Wakana Kimura Studio ©Wakana Kimura

ロサンゼルス大学院では、クリティカルセオリーのトレーニングなどから文化の違いだけでなく、日本国内の美術表現と西洋のアート業界の表現の微妙なニュアンスの違いに気が付きました。例えば、日本では抽象的な事象から何かしらのコトバとして読み解く文化がある一方、アメリカのアートシーンでは、抽象は具象の対義語で「形のない」「何もない」という理解で話されていました。そこで、異なる言語を話す多様なバックグラウンドの人々に向けたアートを、色や形を複合的に使って〈目で読みやすい〉形で提示してみようと考え出しました。結果として、アメリカ文化の中での視覚表現を使って制作することを目指しました。Thesisの作品「CHARACTER」(2011)では、あらゆる視覚言語を重ねて、視覚的なカオスを作り出すことをコンセプトに制作しました。

さらに、ポモナ大学美術館の展示用に制作した「One trifle-beset night, t'was the moon, not I, that saw the pond lotus bloom」(2015)、横約10m、縦が約2m、パネル4枚から成る大きな作品です。伝統的な絵画や仏画の要素を取り入れながら新しい形に落



CHARACTER (2011) Photo by Wakana Kimura Studio ©Wakana Kimura



Pomona College RSVP Los Angeles 展 (2015) Photo by Benton Museum of Art ©Wakana Kimura

とし込んでいます。この作品では自分の視覚言語を打ち出すよりも、過去の余韻から何かを紡ぎ取って現代の視覚言語として形にしていくことに力を注いでいます。

次のスライドはロサンゼルス市地下鉄 Through the Eyes of Artists シリーズの「Hole of Donut」(2012)はロサンゼルス市地下鉄とのプロジェクトで、渡米して初めてのオフィシャルな仕事でした。イングルウッド市をテーマに制作してくれという依頼でその土地の風景や文化が構成要素として取り入れられています。私の現時点でのキャリアはパブリック・アート等のプロジェクトに関わるが多くなっています。



Hole of Donut (2012) Photo by LA MTA ©Wakana Kimura



Echizen Mandala (2019) Photo by Yukie Kameda / Imadate Art Field ©Wakana Kimura

2019年には、ロサンゼルスにある日米文化会館で私がキュレーションした越前和紙の展示をきっかけに、越前市からアーティストインレジデンスに招待されました。これが13年ぶりの日本での作品制作発表の機会となりました。地域の1300年の歴史のある紙の神社や紙すき職人の文化の中で、和紙職人へ仏画教室を開くというプロジェクトを行いました。女人禁制の神事にも参加し、紙の女神の絵もライブパフォーマンスとして雅楽と一緒に奉納しました。それらをインタラクティブな体験型のパフォーマンス、インスタレーションとして地域で一番古い7世紀から続く寺の本堂で「Echizen Mandala」として発表しました。人々が手を合わせて涙を流しながら作品を見てくれる、これまでの仕事とはまったく違う体験をしました。

仏画教室のきっかけは、2016年にLAの両大本山北米別院禅宗寺（曹洞宗）から依頼された涅槃図プロジェクトです。現代美術として涅槃に入った仏を制作する、きわめて難しいテーマでした。私のプロジェクトに対するアプローチは、自分のなかで視覚的にそのものを研究・リサーチする時間が非常に長く、その上で理解し、それから作品にアプローチする工程です。このプロジェクトも高野山にある密教大辞典や経典に至るまで様々な文献や絵画をリサーチしましたが、曼陀羅などの視覚言語をリサーチしながら試行錯誤し、完成までに6年の歳月を要しました。

この様に文献のリサーチから始め、視覚的な理解を深めながら制作しました。仏画表現の意味などが文字の様に理解できる様になり、ロサンゼルスの高野山米国別院で現代



Nehane (2023) Photo by Wakana Kimura Studio ©Wakana Kimura

美術的な仏画教室を開くことになりました。日本人、アメリカ人、クリスチャンも無宗教の人などの幅広い参加者と共に仏画を学ぶ機会を提供しました。

そして2023年2月、伝統とは違うアプローチで、現在のロサンゼルスに風物も盛り込んだ新しい涅槃図が6年越しで完成し禅宗寺に納めました。ロサンゼルスという土地で、これから数百年に渡りこの涅槃図をツールとして使う人たちにとって分かりやすい形、色、素材を選みました。つまり古代から近代までの仏画の歴史が、私のフィルターを通して現代にしっかりと翻訳されました。この作品も作家としての大きな転換点になりました。

その後に制作した「LA MANDALA」に関しては、COLAの受賞者の展示作品に縛りがないこともあり、その時点でしたいこと、溜まっているものを出す機会にしようと考えました。そして仏画という新しい視覚言語を手に入れた上での新しい試みで現代のロサンゼルスにおける曼陀羅を2次元の紙に落とし込む事をコンセプトにしてプロジェクトに取り組みました。結果オーディエンスの反応は非常に良く、この新形態の異文化や時間の重なった曼陀羅的なものを体験し興味を持ち深く考察してもらう機会を提供できました。私は今後もアートを制作することで新しい価値観を提示したいと思っています。



LA MANDALA (2023) Photo by Satoshi Nakashima / Wakana Kimura Studio ©Wakana Kimura

コメント：宮脇千絵氏

中国西南地域に居住するミャオ族の衣装の研究をしている。アートは専門ではないが、伝統を受け継いでいくところと、アーティストとしてのオリジナリティ、あるいは革新性をそこに足していくという点が、自分の関心に近いと感じた。

ミャオ族の人々にも、オリジナルの民族衣装があり、布を作り、染め、刺繍・縫製をして衣装にしてきた伝統があるが、やはりここ20年くらいで、村に残って染織する人々は急激に減っている。面白いところは、そうして伝統的衣装を手放した後に、私たちが着ているような現代的な洋服に一直線に行くのではないという点。日本人が着物から洋服へ一挙に移行したのとは、様子が違っている。染織をする代わりに外で売っている布を買い、それを使って自分たちの衣装を作る。素材や作り方を変えながらも、どこかでオリジナリティを保ちつつけている。

Wakanaさんの話も、伝統を踏まえ、継続させながらも、新しいものを取り入れ、デザインを変え、自分の作品を作っているという点が非常に興味深かった。

リプライ：Kimura氏

〔「IMA PHOENIX」(2022)について〕日本で一番の檜風呂のシェアのある会社・檜創研とコラボレーションしてパフォーマンスをした作品がある。まっさらな檜風呂に、音楽に合わせて鳳凰を描いた。檜は神聖な素材なので、色を乗せるということはタブーであるが、私が絵を描くことで生じるケミストリーを試したかった。そのときの大きなテーマが、いかにして伝統を残すかということ。

LAで曼陀羅を描く方が、コンテンポラリーだとして受け入れられる場合もある。日本では、不敬だと感じる人もいる様だが、その境界線や範囲を少しずつ変えていかなければ、次世代に受け継がれない。自分の作品を通して、伝統や職人技も残っていくように考えながら、制作している。

フロアを含めた質疑応答

宮脇氏:一つ質問。たとえば研究者であれば、世界のさまざまな出来事を自分で解釈し、論文として言語化する。世界を見渡して、取り込んで表現するという点では、アーティストも近い。ただ、伝統的なモチーフからインスピレーションを得る、あるいはそういうものへのオマージュという場合、どこで線引きされるのだろうか。盗作だというような批判は受けないのか。

ファッション業界にも、同じような問題が。日本における70年代のフォークロア、

2000年代のエスニックの流行のように、世界でも少数民族の伝統的な柄がファッションに取り込まれてきた。しかし最近、そのことに対して、当事者たちが異議申し立てをおこなうことが増えた。ヨーロッパのあるファッションブランドがアフリカの伝統的な柄を真似て売ったことがあるが、訴訟になった。文化の盗用として問題視されることも。

Kimura氏: LAは、アーティストの知的財産権、著作権を守る法律がしっかりしている。とはいえ、SNSで自分の作品がリプロダクトされたりする可能性に関しては、この時代、防ぎ様がない部分もある。

ただ、そういう権利の問題、著作権の保護期間作家が亡くなってから60年という話と、2500年のあいだ脈々と前の作品を模写することによって受け継がれてきた仏教美術に現代のコピーライトの考え方を当てはめることは出来ないのではないかと私は解釈している。

末村: 今回、宮脇先生にコメントを依頼した理由は、Wakanaさんの活動の「描く」と、宮脇先生の研究の「装う」が、どちらも自己表現であるという点で共通していると考えたから。しかし、違う部分もあると思う。個人的には、「描く」には迸り出るようなイメージがあるが、「振りをする」という意味にも使われる「装う」には二重性が感じられる。さまざまな表現方法のなかで、「装う」の独自性とは。

宮脇氏: 「装い」とは、私たちが身体上で表現することすべてと捉えている。アーティストの活動との違いは、身体を伴うかどうか。アーティストは、作品が完成したら自分の手を離れ、鑑賞されたり、評価されたりする。対して「装い」は、自分の身体と密着していて逃れられない。

Kimura氏: 私の場合「描く」は内面から自然に出てくるという感じではない。どちらかと言うと、リサーチを重ねて対象やテーマを俯瞰して見たことを表現している。コミュニケーションのツールとして、言葉で伝えきれないところを二次元のメディアで伝える。感性で描くというよりも、TPOに合わせて言葉を使うように、絵画というツールを使いこなしたうえで、オーディエンスがわかりやすい視覚体験を作っていくプロセス。

フロア: 最近のアートブームで、海外の大きなギャラリーが日本に入ってきたり、それで絵が売れたりという話を聞くと、すべてがマーケットに通じているように感じる。美術館やパブリックスペースが、プライベートなギャラリーや個人に移り、お金をもつ人が仕切る。アーティストは、マーケットのことをどう考えているのか。それは例えば、どのような活動があるのか。最近、町おこしとかビエン（トリエン）ナーレとか言われるものなのか、アーティスト個人としての動きなのか。

Kimura氏: 作家の活動はマーケットをどう考えるかという視点でも多種多様になっている。私の場合は現時点でビエンナーレ等からは距離感のある活動をしている。

末村: アートと商業の話が出たが、先ほど、ヨーロッパのファッションブランドがアフリカの柄を使って訴訟になったという話も。この場合、ファッションと商業を切り離し

て、アフリカの柄を健全に守っていく試み、ファッション自体の働きや役割で伝統を保持していくという動きは見られるのか。

宮脇氏：私は、ファッションはそもそも商業だと思っている。ファッションになった時点で、消費ということから切り離せない。ただ、伝統的なものに関しては、それだけではない部分も。当事者たちがつづけたいと思わない限り、外からの働きかけだけでは、うまくいかない。アートもファッションも、外からの評価が考慮される世界。商業を含めて一つのシステムを作っている。そのシステムに参入して、ある程度乗っていかないと、つづけることは難しいのか、そこは切り離せない部分でもあるのかと感じた。

いかにして伝統が残っていくかという、いったん自分たちの手から離れる必要がある。たとえば、観光客が珍しがって売れるというような、第三者からの目線や介入。そこで自文化のユニークさを自覚して、はじめてその価値を再認識する。内部から残そうという動きは、その後出てくるかもしれないし、出てこないかもしれない。ある程度の商業化、あるいは第三者の手に渡るというステップは、伝統を残していくうえで必要と考える。

末村：伝統を残すには第三者の介入という話、龍安寺の石庭に通じる。日本の伝統文化として、絶えず大切に扱ってきたわけではない。ほったらかされた時期もあったが、欧米の評価を通して、自文化の価値を再評価していく、そして売り出していく。そうであれば、そのプロセスがあったからこそ、石庭が生き返ったと見ることも可能。石庭については、日本人はやはり欧米の評価に弱いのかと短絡的に理解していたが、伝統が残っていくうえで、普遍的なプロセスがある気がして納得した。

フロア：やはり誰かが認めないと。民芸も、柳宗悦が芸術だアートだと言ったから。そうになると、次は作家をアピールする方に向かう。ミャオ族の衣装にも、ブランドや有名なアーティストがいるのか。

宮脇氏：2005年くらいから調査をはじめたが、コロナもあって最後に行ったのは2019年。その時点では、ブランドやデザイナーは出てきていない。もう少しすれば出てくるかもしれない。

末村：アートと工芸の違いは、作家性と匿名性か。アートは作家の名前が重要だが、職人技の工芸は精確ならば誰が作ったか気にしない。

宮脇氏：〔ミャオ族の衣装の写真を示して〕約20～30年前と最近。ウエディングドレスも、男性は西洋化してスーツ、女性は自分たちの衣装を着用するルール。最近は、外で売ってる服だったり、ミニスカートになっていたり。伝統衣装というより、お祭りなどの行事で、自分たちの衣装として着る。博物館には、いわゆる伝統的なもの、手仕事で作ったものも。素材は大麻、自分たちで植えて、糸を作る。

フロア：有松絞りなどは、個人でもつづけているが、ミャオ族は継承されているのか。

宮脇氏：この10～20年で、自分で作る人は少なくなった。しかし、ここでも他者の目

が関係している。少数民族の染織技術が世界文化遺産に登録されることがあるということで、今はそれを目指している。

末村：たしかに、〈アート〉は敷居が高いと感じる。とくに、〈美術〉よりも〈アート〉、さらに〈現代アート〉と言われるとよくわからなくなるが、今日は、マーケットとのつながり、アート・美術・工芸の異同、「装う」との共通点など色々と話を伺えて有意義だった。

すえむら・まさよ
(南山宗教文化研究所)